動詞ウ音便の一考察(上)

藤枝德三

一　序

管見によると西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經(一六六〇)に

滿　タタウテ
宣　ノタマウテ

とあるのが動詞ウ音便の最も古い例である。それ以前の現象に就いては確定的な事を云へる資料の持合せがない。

ウ音便の說明をハ、バ行四段の連用形の活用語尾が助詞テに連る時ウに變化する現象であるとする事に就いては大體異見を插むべきでないが、ウ音便の史的展開の跡を辿つて見ると文獻上の事實だけを根據とすればウ表記以外の表記も現れるのであつて、稍〻同じ時代に發生したと思はれる撥音便、促音便の表記をも考慮に入れるとその時代のウ表記の音便現象は今日のウ音便と云はれるものと果して全く同一のものであつたかどうかと云ふ疑問が生ずるのである。文獻上に現はれた文字表記のみを根據としての立論をするのであるから從來のウ音便說を否定し去るよしもない

が、結論を先に述べるとウ音便と云ふよりも寧ろ撥音便に近いのではなかつたかと推測し度いのである。

二　漢字音のウ表記例

ウが撥音的な表記號として用ひられたと考へるのは字音表記の例から導かれる事である。

n音に用ひられた場合

慘　サウ　龍光院藏大毗盧遮那成佛神變加持經（一七一八）

燦　サウ　京都帝國大學附屬圖書館藏蘇悉地羯羅經朱點（一七三九）

繁　ハウ　軫　シウ　管　クワウ　甦　セウ

吉澤博士著國語說鈴所載　京都興聖寺本大唐西域記第十二卷

これ等の例はu音に發音したものとすればそれ迄であるが次の例の様に唇內入聲に用ひられた場合

葉　ヨウ　眞福寺藏　將門記（一七五九）

k入聲に用ひられた場合

樂　カウ　醍醐寺藏　法華經釋文（一五九四——一六六四）

m音に用ひられた場合

紺青（コウ）　西大寺藏金光明最勝王經白點

とあつて同じウ表記でもこの様に多様の字音の表記に當てられてゐるのを見ると發音は夫々異つてゐたものであらう。殊にn音に多いと云ふ事、m音にも用ひられた例があると云ふ事は注目すべき事と思ふ。かくの如き自由な表記はウが一種の表記號であるから許されのでたであらう。

ウはng音に用ひられるのが普通である。所がその表記當初はng音の漢字は韻尾がu音で發音されてゐたのではなく、矢張り撥音風に發音されてゐた様に思はれる。若し成音ウの韻尾を以て發音されてゐたとすればそれは支那の方言がさうであつたものをそのまま我國に傳へられたとも考へられる。然し今日支那の各方言にng音を我國に於けるが如き成音ウを以て發音する所を見出し得ないからこの考へ方は取り棄てねばならぬ。宣長も上代にng音をm n音と區別した例を地名字音轉用例に多く擧げてゐるのを見ても、ng音を文字の上で明瞭に認めてゐた事隨つて發音の上でも區別してゐた事が分る。又ng音を口音化してu音となしその表記にウを用ひたとする考へ方も古代撥音否存在論を證明する事の出來ない今日では一種の獨斷と見る外はない。上代から平安朝へ下つた文獻を見ると一層その事が確かに云へる様である。つまり撥音記號である　ㄥ〉くム　がng音表記にも用ひられてゐるのである。先づそれ等の記號は既に撥音記號であるとされてゐるので例を擧げるまでもないが參考の爲に管見より抄出すると

炭タく　軒ケく　奸ケく　讒ェく　石山寺藏法華義疏(一六六二)
且タ〉　贅サ〉　石山寺藏金剛瑜伽千手千眼自在陸修行儀軌(一七〇五)
炭タ〉　緊キ〉　近キ〉　雲モ〉　高山寺藏瑜悉地法卷下(一七一六)

刀ニ〉　西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經朱點（一七三八）

等であるが此の記號が又次の如くng音に用ひられてゐるのである。

虹コム　西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經白點（一六六〇）

蟲チ〉　衆シ〉　隆ル〉　央ア〉　醍醐寺藏法華經釋文（一五九四——一八六四）

砰ハム　嶋スム　石山寺藏法華義疏（一六六二）

昴カウム　石山寺藏成唯識論（一六八〇）

營キヤム　塑ヤム　響カム　蟯カム　盈ユム　高野山龍光院藏大毗盧遮那成佛神變加持經七帖同疏一帖（一七一八）

榮ユヤム　響カム　影カム　井シヤム　盈ユム　彰シヤム　廂サム　敝シヤム　蟯キヤム　賞シヤム

高野山龍光院藏明詮加點大毗盧遮那成佛神變加持經

邦ハム　凶クキム　眞福寺藏將門記（一七五九）

これ等は正しく喉內音に發音されたとは斷定出來ないがそれに近く發音された事は想像出來るであらう。特に成唯識論の昴カウム の記號はng音の表記としては可成愼重なものであり、又ウが撥音的な記號に用ひられたことを思はせるものである。ム〉くの記號は正しい喉內音の表記ではなかつたかして次の場合の如く種々の字音表記に用ひられてゐる。

も入聲に用ひられた場合

偈カく　卒ソく　黠カく　揖セ〉　折セ〉　石山寺藏法華義疏（一六六二）

鉢ハ〉　高山寺藏蘇悉地法下（一七一六）

唇内人に用ひられた場合

法ハ〉　法隆寺藏妙法蓮華經玄贊（一七八二）

これ等は入聲と云ふよりも韻尾を少し撥ねて發音した爲にこの記號を用ひたと見る方が穩當である。

疱ハ乙　高野山龍光院藏大毗盧遮那成佛神變加持經（一七一八）

注チ〉　京都帝國大學附屬圖書館藏蘇悉地羯羅經（一七三九）

とあるのも撥ねる爲に撥音記號を用ひたのであらう。この樣にng音が平安朝に於て古訓點の字音の註の中に保存されてゐたとすれば、ng音に表記された韻尾のウは撥音記號ではなかつたかと思はれる。隨つてウは漢字音に於ては〈〉く　及び　フ〉（後に述べる）と同じく便宜的な記號に用ひられたと見るのが今の所最も穩かの樣に思ふ。

中には「岡井愼悟氏日本漢字學史一二一頁三五上代字音の一現象」の中に

前略　ウ音には今日吾人の發音するよりもngの音を帶びては居なかつたか　註　又ngよりもワ行に近きウも有つたので無からうか

と云はれるが、これは字音に關する表記のみの御意見と伺はれる。恐らく國語のウ音の溯源を考察しての結果ではなからう。

註　國語國文第九卷第三號　一つの音韻代用（朝山信彌氏）參照

三　音便のウ表記例

最初にウの表記が一種の符號として用ひられたのは字音に關するものであつたであらうが、國語假名遣のウ表記は漢字音からの影響を受けた音便に適用された場合には一符合と看做れる樣なものを見出すのである。一二の例を擧げると、

ツカヘマツルのウ音便はツカウマツルであると考へられるが、このウは矢張り表記號ではなかつたかと思はれる。春日博士が御注意されてゐるが如く西大寺藏金光明最勝王經卷二の白點に

佛ニ承ツカマツルコトシム得

とあるのはマツルの語頭のm音に同化されてkaの音尾が撥音風な發音をしたのではないかと思はれる。大矢翁の假名遣及假名字體沿革資料を拜借すると石山寺藏蘇悉地羯羅經略疏（一五五六）に

使　ツカムマツル

とある。これを大矢翁は撥音とされてゐるのは肯かれることである。但しこのm音は強い唇音ではなかつたであらう。更に院政期になると醍醐寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經略疏（一七九〇）に

奉　ツカマツラム

とある如く、撥音表記法の稍〻一定した院政期にも撥音表記省略の方法を採つてゐるのは、鼻音の微弱な爲であつたからであらう。そして次第にウ音に近づいて行く前提を示してゐるものと思はれる。ウ表記はこれ以前に未だ管見

に入らない。尤も形容詞のウ音便は石山寺藏成唯識論（一六八〇）に　命短カウ　とあるのが文獻上最初の樣であるが、動詞のウ音便と同一に取扱ふべきか否かに就いて筆者の考へが未だ纏つてゐないので後勘を期する事としたい。

以上の例は今日ウ表記であるべきものと思はれてゐるものが、撥音風なものであつた事を考へるに多少とも役立ちはしないかと思はれたから擧げたのである。

四　語彙の中に起るウ音便

倭名抄（一五九五）に

首（加宇倍）　冠（賀宇布利）　弟（於止宇度）　妹（以毛宇止）

その他　マウズ　マウス　等は夫々　カミベのm　カガフリのga　オトビトのbi　イモビトのbi　マヰズのwi　マヲスのwoの子音が撥音化して同時に所屬母韻を同化してその表記を表記號のウを以てしたと解してはどうか。新譯大方廣佛華嚴經音義第十七に

蒙惑　上音牟　訓加可宇布流

とあつて宇を故意に小字にしたのは「カカフル」から「カウブル」までの變化の途中、カとフとの間に撥音が鼻母音を介在せしめた爲の表記と見られないであらうか。

徐々　ヤウヤウ　の原形に就いては「國語資料としての訓點の位地　國語・國文昭和十年二月號」に春日博士は石山寺藏大智度論（一五一八）にある　安徐ヤヤク　をそれとされてゐる。これもウ表記の省略ではなからうか。さうすると

聖語藏願經四分律古點にある、ヤウヤク　のウは少し鼻母音を帶びてゐたのではないかと思はれて來る。

聖語藏大乘地藏十輪經元慶點（一五三七）の

覩　カウハシ

のウはguの子音の撥音化したものであつて、ウを矢張り撥音的な表記號と見たいのである。

五　ハ行四段のウ音便

字音のウ表記の考察及び國語假名遣の語彙中に起るウ音便の性質から推して、ハ行四段のウ音便にも前記の考へ方が適應されてよいのではないかと思はれる。然し筆者の持つ資料も極めて乏しい非ではあるし、時代を遠く溯つた語の音韻組織の考察は非才の手に餘るものがあるが、只乎元に有り合はせの資料を列擧するだけで以て專門家各位の御教示を仰ぎ度い。左に例を年代順に表示すれば次の如くになる。

音便表記	例	年代	書名	所屬
ウ	タタウテ ノタマウテ	（湛） （宣）	一六六〇	大毗盧遮那成佛神變加持經	西大寺
ウ	ヨバウテ	（呼）	一六六二	法華義疏	石山寺
省略	ヨバテ	（呼）	一五九四―一六六四	法華經釋文	醍醐三寶院
フ	オホフテ	（蔽）	一六八〇	成唯識論	石山寺

フ	ハラフテ	（除）	一六八四	大般涅槃經	石山寺
フ	ネガフテ	（願）	一七一四	妙法蓮華經	佐伯良謙師
フ	オモフシ	（想）	一七一五	蘇悉地法	高山寺
フ	イフツル	（言）	一七一八	大毗盧遮那成佛神變加持經大毗盧遮那成佛經疏	高野山龍光院
フ	ナラフテ	（修）	一六八一―一七六六	妙法蓮華經	高野山龍光院
省略	ステ	（吸）	一七二九	史記呂后本紀	毛利公爵家
省略	タタテ オモテ	（湛） （思）	一七三八	大毗盧遮那成佛神變加持經	西大寺
フ	タマフテ	（賜）	一七五九	將門記	眞福寺
ウ	オウツ	（逐）	一七七六	大慈恩寺三藏法師傳	興福寺
ム	ウシナムテ イムテ	（失） （謂）	一七三九―一七八一	蘇悉地羯羅經	京大附屬圖書館
フ	イフテ	（言）	一七八二	妙法蓮華經玄贊	法隆寺
フ	イフツ トフシカ イフテキ	（言） （問） （言）	一七九〇	大毗盧遮那成佛神變加持經略疏	醍醐三寶院

右の表に依れば八行四段のウ音便が西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經白點（一六六〇）及び同朱點（一七三八）に

湛　タヽヲ（朱點）　タタウテ（白點）

ノタマウテ（朱點）　白點のウは稍々不明瞭であつてフとも訓まれるが、右側の朱點に明かにノタマウテとあるから白點も

鬱訶薩とノタマウテ（白點）　矢張りノタマウテであらう

石山寺藏法華義疏（一六六二）に

嗟　ヨバウテ

とあるがこれ等は例としては餘りに僅少である。それ以後は興福寺藏大慈恩寺三藏法師傳（一七七六）に

逐　オウッ

老子道德經（二二三八）に

負　ヲウテ

と現はれるのみで室町時代以後の抄物に盛んに現はれるウ音便の例に比して餘りに少なさ過ぎる感を抱かせるのである。只だ　ヨバウテ　のみはウ表記を踏襲してゐるらしく思はれて例外とすべきである。尤も　フ→ウ　の變化は石山寺藏阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌（一七五五）に

倒　タウル

とあつてウ表記がハ行四段の音便以外にも用ひられてゐるのであるが、かかるウ表記の實例は非常に少なく又他の

音韻變化に比して遲い時期に現はれて來る。即ち

ハ↓ワ

美　ウルワシ　聖語藏大乘地藏十輪經(一五三七)

髮ノ彩　ウルワシキコト　西大寺藏金光明最勝王經白點

猗與　ウルワシキカナ　黑板博士藏金剛般若集驗記

ヒ↓キ

額　ヒタキ　仁和寺藏金剛頂瑜伽護摩儀軌(一六五一)

自ラ蔽ツキエタラム　西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經(一七三八)

フ↓ウ

倒　タウル　石山寺藏阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌(一七五五)

ヘ↓エ

苗　ナエ　跋アシナエ　金光明最勝王經音註(一七三九)

ホ↓ヲ

爲鬼所持　クルヲサレ　石山寺藏大般涅槃經(一六八四)

(顏カヲは上代以來の問題でこれを取り上げれば年代はもつと遡る事が出來る)

かくの如く　フ↓ウ　の變化が最も遲れてゐることが分るであらう。然るに　ウ↓フ　即ちウ列の混亂は既に起つ

てゐたのであつて、而もそれが他列の混亂よりも早い時期に現はれてゐる事が分るのである。卽ち

ワ→ハ

サハイテ　將門記（一七五九）

キ→ヒ

藍　アヒ　法華經單字（一七九一）

ウ→フ

種　ウフル　醍醐寺藏法華經釋文（一五九四―一六六四）

エ→ヘ

所以　ユヘ　石山寺藏法華義疏（一六六二）

ヲ→ホ

棹　サホ　文鏡祕府論（一七九八）

右の如く　ウ→フ　の混亂が最も初めに現はれたとすれば　フ→ウ　の變化もそれに對應して早かるべきものと思はれるが、事實は豫想に反して最も遲く現はれた事はウ表記が撥音風な表記號であつた爲に撥音表記以外の音韻變化の表記には撥音風の表記との區別の必要上用ひられなかつたのであらう。そこで西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經白點の　タタウテ　ノタマウテ　は撥音表記の一種と考へられる樣になるし、倭名抄に於ける前述の例の變化と同一

に考へられぬであらうか。尤も春日博士も云はれる如く

即ち　ヒ→ヰ　の變化が前述の如く一七三八年代で可成り

時期を要すると考へるべきである。隨つて大毗盧遮那成佛

あつて、ウ音便と斷定する事に疑問が持たれるのである。

非常に數少なく而も院政時代に入るとウの代りに殆ど總て

べきであらうか。又次の表記もウ音便と斷定し兼ねる例で

七三八）に

心ノ水　タタテ（朱點）（一七三八）
タタウテ（白點）（一六六〇）
タテマツルトオモテ（朱點）（一七三八）

とあつて白點タタウテとあるよりも七八年後の朱點にはウ表記が省かれてゐる事は

寺藏華經釋文（一五九四―一六六四）に

呼　ヨハて　ては乎古止點

とありそれ以後の毛利公爵家藏史記呂后本記（一七二九）に

嗹（ステ）血盟（を）

とあるのも矢張り撥音記號の省略であつたのであらう。

注目すべき事であらう。又醍醐

この時期に吉澤博士も云はれる如く促音表記も省略されてゐたらしく思はれるのであつて、この場合も促音ではなかつたかと考へられるが當時の音韻變化を撥音、促音、長音と明瞭に區別し得る適確な根據は全くないのであるから促音であると斷定するわけにも行かないのである。この場合も如何なる音であつたかを推定する爲には唯、ウ表記を手掛りとして間接の道を辿るより外に方法はないのである。西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經及び石山寺藏法華義疏の例がウ音便と斷定し兼ねるとすればウの音價の推定限界は可成り狹められた事になる。

字音表記の符合として假用したと思はれるウと云ふ音符が不純な國語音である音便に適用された場合には、これも亦字音に於けると同じ音價が豫想されるであらう。國語が多音節語であり、それを表記する文字は卽ち假名は音節文字と云へるのであるが、その音節文字を以て表記されたものを發音から除外すると云ふ事がないのは多音節語の特色である。アルハベツトの如き單音文字に於て子音と母音との分立表記に依つてゐるものは主としてその中の子音の發音が除外される例は周知の事である。從つて又我國の片假名がアルハベツトの如き單音文字と異り一音節毎に一つの假名を充當させるから、純正な國語音を表はした場合であればその音に對する假名を除外する事は原則としてはあり得ない事である。然るに漢字の如き閉音節の多い單音節語の表記を假名で以てする事は不可能な事であるが、その假名の中の或る一部分のものをこの場合ならばウを一種の音符として轉用せしめて成音と認め難い撥音促音の表記に充當させたのがウ表記の場合と認められるから、この樣な轉用された假名は一種の單音文字と云ふ事出が來るであらう。

隨つてかゝる符號は發聲から除外される可能性も多い事にならう。我國の萬葉假名が字音の閉音節の尾音を除外し

て作られた事に徴しても肯かれる事である。故に字音の場合と同じく音便に於てもその表記の假名が除かれた場合には純正な國語表記の原則に悖るものであつて、除かれた部分に假に或る時期になつて符せられた假名を一つの成音を表記したものとは認める事が出來ないであらう。ウが字音に於ける單音ng音を表記する音符であつたのであるが、それが音便に於ても單音を表記する音符であつたのであつたらうと思はれるのである。隨つて音節としては知覺される現實性を帶びた音價を有するものでないが爲に、國語音表記の原則から考へれば表記から除外される事もあり得る事であらう。先に擧げた堪タタウテとある場合に於て右註の一七三八年の加點にはウが省略されてゐるのは、それ以前のタタウテ(一六六〇)のウは一種の單音表記の音符であつた事を裏書するものであらう。それより以後の前掲の呂后本紀(一七三三)の　嗟ステ　及び將門記(一七五九)の　語ツクロテ　も國語音としては不純な音の表記の一種であつた事は勿論である。

平井秀文氏は國語・國文第五卷第九號に於て將門記の訓點を調査されて「表記こそ見えね音便たる事は明かであるが、日語法別記にこの例をウ音便に取扱はれてゐるのは失考であらう」とし國語史概說の促音說を踏襲されてゐるのは當を得てゐると思ふ。

ここに更に省略の表記の音韻組織に立入つて考へて見よう。かく省略される事から推すとウは一成音とは認め難い輕い鼻母音に近いものではなかつたかと思はれるのである。この時代の假名省略の例は　タ行四段の場合　ラ行四段の場合　それからこのハ行四段の場合とである。

第一にタ行四段の場合は黑板博士藏金剛槃若集驗記に

有タモテ　發タテ

とあるが、これはタ行四段の音便化であるからと云つて直ちに促音の例とすることは速斷であらう。「國語國文の研究　本邦音符考」によると吉澤博士は鎌倉時代になつて促音表記が確定したと云はれてゐる。然し表記の確定と共にその發音も今日の如き促音となつてゐたかどうかと云ふ事は明かには云へないのではなからうか。今日の發音を以て推してさうであつたらうと思ふだけの根據しか摑めないのではないか。

第二にラ行四段の音便は仁和寺藏金剛頂瑜伽護摩儀軌（一六五一）に

抄　トテ　了　ヲハテ　爲　ツクテ　至　イタテ　乘　ノテ

石山寺藏法華義疏（一六六三）

因　ヨテ

が現はれるが、これは流子音Lが舌端の口蓋化により閉鎖音となり促音化する事は現實の常識として又孰れの國の實語現象の中に於ても見出される事項ではあるけれども、王朝時代果して促音化した表記であつたかは急には決定出來ないであらう。

第三のハ行四段の場合は

娑羅粥　トイヘ　謂胡摩　トイヘ　以下略

卯酉　者寫錯也　醍醐寺藏法華釋文下卷（一五九四—一六六四）

京都帝國大學附屬圖書館藏蘇悉地羯羅經（一五六九）

勿（なモハカリタマフコト）慮　佐伯良謙師藏妙法蓮華經（一七一四）

是如（ノシトイハク）謂背阿（スルヲ）耨菩提寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經略疏卷十七（一七九〇）

以（なモミんニリテ）爲（ハムトスルナリト）來　同經略疏卷十七（一七九〇）

これ等の例はハ行四段のウ音便と見るよりも撥音便の省略表記法と見るのが穩當である。蘇悉地羯羅經及び法華釋文にある　……トイハの助詞ハはこの場合半濁音となつてゐるらしく、その考察も別に興味ある問題を提示するであらうが今は此の事には觸れない。撥音から　イツハ　と促音化して行く第二段の過程も考へられる事である。これ等の三つの場合の外に明かに撥音表記號を持つてゐるラ行四段の音便の例が現はれて來る。即ち

石山寺藏成唯識論（一六八〇）に

渉　ワタムて　ては平声止點

石山寺藏大般涅槃經（一六八四）に

止　トトマンて

東北帝國大學附屬圖書館藏史記孝文本紀（一七三三）

欲　ホンス

とあるのは流子音の鼻音化であつて撥音便とする事が出來るであらう。これから推して第一、第二、第三の場合も撥音便風の省略記號ではなかつたかと思はれる。

動詞ウ音便の一考察(下)

藤枝德三

六　ハ行四段ウ音便の鼻音化の契機

有聲音bdの前に鼻母音が先行する事は以前から知られてゐる事であるが、更に今まで擧げて來た音便資料に依つて見ると無聲音tf及びsの前にも　例へば

所思(オモフシ)　高山寺藏蘇悉地法(一七一五)

の如く獨立性のない渡り音としての鼻母音が起る可能性がある樣である。その中tの前に起る現象即ちハ行四段の連用形からtoに承接する場合の音便表記ウが合音のuでないもの、筆者の推定によれば鼻母音的なものとする事にどれだけの積極的な論據があるかと云ふ事である。それで先づ法華經釋文のヨバテ　の省略表記法を促音か撥音か孰れであるかを考へて見よう。先に擧げた金剛槃若集驗記、金剛頂瑜伽護摩儀軌、及び法華義疏にあるラ行四段、タ行四段の音便の例は夫々促音とも又リ、チ、音の落ちたものとも速斷は出來ぬ事は前に述べた所であつて、王朝時代の言語意識からして促音の發生が此の時代に行はれたとは思はれないから　ヨバテ　も促音と斷定する事は出來ないであ

らう。矢張りこれ等はb、d、f、s、の前に鼻母音が起ると同様の經過を表はす表記であつたと思はれる。卽ちtの前のbaの母音aがñのgliděによつて受け繼がれた事を示す表記でñの表記の一定せぬ儘に表記しないで置いたと見るのは誤つてゐるであらうか。かく考へると法華經釋文より少し以前の法華義疏の　ヨバウテ　大毗盧遮那成佛神變加持經白點の　ノタマウテ　タタウテ　のウの表記もtの前に起る鼻母音を表はしたものと思はれて來る。更に少し臆測を加へると大體字音ng音表記のウは音節力を持つものと認めてよい樣であるが、音便に用ひられたウは獨立性のないもの卽ち音節力の認められぬものではなかつたか。そしてバの母音が鼻音化した事を示すものと見てはどうか。

かくすればウはbの破裂後に來るべき鼻音を帶びた長音の存在を表記したものであつて、佐久間博士の所謂調音の「すべり」としての渡り音の一種の表記とも看做す事が出來るわけである。而してウはuではなくũのソンソネテの表記ではなかつたか。又ウ（撥音的なもの）が所屬する母韻との場合ならばa音には韻尾を鼻音化たらしむべき準備としての長音的なニュアンスが豫想されるではないか。法相宗の聲明に菩薩のサツをsãとしてãを長音とし、而も韻尾を鼻音化する（或は閉鎖音化する）のを常としてゐる所によるとsãとも符號出來る樣であつて一種のソンソネテである事が看取出來るのである。仁和寺藏金剛頂瑜伽護摩儀軌（一六五一）には

都納婆合（トノバム二）　珊你都婆（セントバム）

とあり眞言宗の儀軌には其の他かかる例は多いが、baの母韻aをãに發音した樣であつて恐らくは輕い閉鎖音が鼻音として聞き取られたのによる表記であつたのであらう。一身田專修寺藏唯心抄文意（一八八九）には

寶應（ホウオウ）鑿菩薩（シャウホサツ）

とあつて、此の時代ならば大體長音と見てよい表記であるが、これとても長音の韻尾は輕い鼻音か閉鎖音であつたらうと思はれるのである。逆に鼻音化或は閉鎖音化の前には長音を豫想しても決して無理ではなかつたらうと思ふ。バ行四段の撥音便に就いては既に土井博士も注意せられる所であつて「近古の國語」二六頁（國語科學講座）に

マ行バ行四段活用の動詞の連用形が撥音便となる事は中古からあり、近古に廣く行はれたのであるが、室町時代には更に所謂ウ音便を取つた。ウ音便とは云ふものゝn音がその前にある母音と融合して長音に變音せられるのである。その長音は三種に分れてその中のanの融合したものはうとなつた。

とされてゐる。

又マ行四段のウ表記に就いては遠藤先生が文學第七卷第三號（四八頁）に於て　石山寺藏大般涅槃經（一六八四）に

病　ヤウて

重種本神樂歌に

支乃禰乎保利波宇天

とあり　催馬樂に

末呂爾太宇波良先

とあるのは石山寺藏大般涅槃經にある

賜　タハル

が鼻音化したものとせられた事は私の考へに多大の示唆を與へられたものであるが、かかる中古の撥音のものには既に長音變化への契機が包藏されてゐたのではなかつたか。室町時代のウ音便をロドリーゲス及びコリヤード等はô即ち開音としてある。橋本博士はôはau↓ao↓ôの變化であるとされてゐる。又菊澤季生氏は國語音韻論（三三九頁）に

ハ行四段にauが融合してooとなることは當然と云へるも、而もそのooは開口のôであつてouから來る閉口のôと區別さるべきである。

とされてゐる。尙チャンバレンはその著 Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of Luchuan Language に於て

國語の長母音ôûは二つの母音が並列した爲偶然に合致して出來たもの

としてゐるがとれ等の說は孰れも室町時代に於けるウ音便表記を目安としては妥當であるが、土井博士のお說を基としてハ行バ行四段ウ音便の發生に就いてはそれを撥音便と見たいとする私の考へ方からすれば an↓ao↓ô の過程ではなかつたと臆測を逞しうするのである。そして更に第二過程のaoは正しくは單長母音ではなかつたかと思はれるのであるが資料の不充分な事であるから斷定は出來ないにしても、既に長保頃からauなる二個の母音の並列をわざ〳〵音便發生の際に生ぜしめると云ふ事が疑問である。實際au↓ao（或はoo）↓ôの變化の中の au↓ao（或はoo）への展開が全く混淆として趨歸する所を知らない有樣であるが、それに對して aũ↓aõ↓ô の過程ならば容易に考へられるので

ないか。朝山信彌氏は國語・國文第七卷第十二號「鶴林玉露の黃榜などについて」に於てauの母音群より單長母音の發生の時期を「院政期の末葉頃迄は溯れさうである。」と推定されたので筆者の從來の考へ方に非常な光明を投げられ中古ウ音便の發生を擬音便とする臆測の範圍が一層限定されて來た事を覺えたのである。吉利支丹本に「逢ふ」がvõの形で示されてゐて vau となつてゐない事は當然であらう。更級日記（定家本）に

みるめおふる浦にあらずば荒磯の浪間かぞふるあまもあらじと

の「おふる」を「合ふ」に掛けたとすればauの單長母音と見る事が出來るし又法華經釋文（一五九四―一六六四）に

母　ホウ

金剛頂瑜伽護摩儀軌（一六五一）に

方　ホウ

將門記（一七五九）に

葉、ヨウ

とあるのは例としては僅少であるが、これによつて少し時代の下つた院政頃の單長母音の存在は有力視してよからう。かかる單長母音に先立つた音韻組織は前述の如く鼻音を含むãnであつたと推定すればどうであらうか。ハ行バ行四段の連用形の活用語尾の音韻變化がウを以て表記し始められながらその表記が一時姿を消した事は何を物語るものであらうか。京都帝國大學附屬圖書館藏蘇悉地羯羅經の黑點（一七三九―一七八一）に

失（ウシナムテ）　謂（イムテ）

とあつて鼻音を暗示した表記が見られる。かかる例は他の訓點を索せば更に見出される樣に思ふ。日本文學論纂の中「片假名ワとンとの字源說附言」に於て吉澤博士は久原文庫藏蘇悉地羯羅供養法に

宗　ウカ〉テ　　收　ト〉テ

とあるのを指摘されて、これはn音が促音に用ひられたものと認めてゐられるから、京都帝國大學附屬圖書館藏蘇悉地羯羅經の例もm音が促音表記に用ひられたとも考へられるが尙もつと突き詰めて行けば促音とも撥音とも明確に區別が出來ないのではないか。

先に平安朝初期の加點の金剛槃若集驗記にあつた　タテ　タモテ　が當時の言語感からすれば促音と推定し難い事を述べたが、國語史概說（一〇五頁）に吉澤博士は源氏物語の　見もて行く　を促音表記の省略とは斷定して居られない。それでタ行ラ行四段の活用語尾の音韻變化がその表記省略を以て始まり後に撥音表記を以て表はされると云つた過程は音韻變化の當初それに相當する記號が見當らずにゐた儘に省略されたと考へられさうであるが、單に省略と云ふ言葉で片付けてしまはれない事情も一方には考へられるのである。何故かと云ふと一體訓點の如き傳授を重んずるものにかかる省略と云つた樣なその場凌ぎの方法で表記法を糊塗してゐたとはどうしても解し兼ねるのである。後になつて撥音の發聲が明確となり、ここに撥音記號の案出の必要に迫られ〉の符號が採用されたものゝ、それ迄の間の可成りの長い期間省略そのものが一種の符號であるとする約束が訓點の領域に默認されてゐたとも解し兼ねるので

ある。結局かかる形はチ、リ、の落ちた形であつてその間に表記上に表はし得ない鼻音的なもの即ち微かな鼻母音が介在してゐたと思はれる。隨つて省略されたと思はれる様な形それ自體が一種の發音表記であつてそれで充分用立たせる事が出來たわけである。tate, tamote の夫々の助詞 te の前に母音を鼻音化したẽ があれば表記號省略の如き形であつても何等發聲上に不手際を感じないのである。訓點の誦唱は文體の洗錬と發聲の壯嚴濶達の要素を合はせ持つた態に爲されるものである。謠曲の謠ひ方が經卷念誦の發聲と軌を一にしてゐるのもその二つの要素がある爲である。若し今日の如き促音にしてしまへば全く腰の浮いたものに聞き取られるであらう。この點も充分考慮に入れる必要があらう。前掲の　失ウシナムテ、訓イムテ、穿ウカ〉テ、牧ト〉テ、止トトマ〉テ　も撥音表記の樂用によつてそれが採用せられて表記通りの鼻音的音韻變化の一斑を表はしたものと考へてはどうであらうか。

七　ウ音便のフ表記時代

ãũ から aoo に更に長音の韻尾の閉鎖音化の可能性は既に述べた所であるが後に aoo は長音化し、そして韻尾の閉鎖化は促音化したと考へるべきものであらう。音便の場合のウが表記號としての役割を脱してu音に等しいと認められる音に變化し終つた時にはウは oo で表はされる單長母音への變化を表記するものではなくして au なる母音群の並列を意味するものであらねばならぬから、今日のウ音便の發音は au であるとしても ãũ から直に au へ變化したとは考へられないのである。ãũ から au への變化は一つのギヤップを持つてゐる事に氣付くのである。即ち輕い鼻母音を含む ũ は口を開いた儘にして懸垂垂の値少の下向のみで語音の鼻腔通過への機會を與へる。然し u 音は我國に於ては唇の運動を

伴ふ事が少いとは云へ可成りの口のすぼまりを伴はねばならぬ。鼻音からu音への變化の中に促音的なものを持つて來なければこのギヤップは埋らないのである。院政頃のウ音便と言はれてゐる表記の殆ど總てがウではなくしてソで書表はされてゐる事はanとauとの間に促音に發聲した時代があつた事を物語るものの樣である。換言すれば右の事實はanからauへの直接の變化を否定する根據を提供してゐる事になるのである。このソ表記に就いて口語法別記に

「ひて」「ひたり」を音便に「うて」「うたり」とも「ふて」「ふたり」とも云ふは動詞に因つて何か區別があるかと見るに

として例を擧げ最後に

同一の書にどちらも使つてゐるから二つながら勝手にまぜて用ひたものと見える

とあるが、これには贊成し難い樣であつてフの表記はウと異つた音便表記であつたと考へられるのである。前述の如く西大寺藏大毗盧那成佛神變加持經白點（一六六〇）に　ノタマウテ　とありこのウ表記はそれ以後は石山寺藏法華義疏（一六六二）及び西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經朱點（一七三八）にあり　元永本古今集春上に

日はてりながら雪のかしらにかゝりけるをよませたまうける

とあり　興福寺藏大慈恩寺三藏法師傳（一七七六）に

遂　オウツ

とあるがそれ以前に既に石山寺藏成唯識論卷九（一六八〇）に

蔽　オホフて　　ては乎古止點

石山寺藏大般涅槃經卷第二(一六八四)に

除　ハラフて　て は平古止點

佐伯良謙師藏妙法蓮華經(一七一四)に

少習樂(ネカフて)　小法を　て は平古止點

高野山龍光院藏大毗盧遮那成佛神變加持經(一七一八)に

像トイフツル者

同院藏大毗盧遮那成佛經疏(一七一八)に

十二因緣者　イフツル

とある。これによれば西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經白點(一六六〇)を下る事二十年後に既にハ行四段の活用語尾の變化がフを以て表記されてゐるのであつて、その間にウ表記のものが法華義疏以外に見出せない。――否定の決定は實は最も危險な論ではあるが――とすればンは從來云はれてゐる如くウの書誤りであると考へる事は躊躇せられるのである。この事は拙稿「鎌倉時代の國語資料一二、國語國文第九卷第十二號九九頁」に於て觸れて置いた。ウ表記の動詞音便形が假名遣及假名字體沿革資料によれば老子道德經(二二三八)に

負　ヲウテ

と初めて表はれる事も先に述べて置いた所である。而してンウ表記はその間のウ音便形と云はれる表記を獨占してゐた

と思はれるのであつて、例へば管見によれば

將門記(一七五九)に

惠賜　メクミタマフテ

妙法蓮華經玄贊(一七八二)に

教　ナリトイフテ　觀　イフテ

醍醐寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經略疏(一七九〇)には全卷が總てがフ表記となつてゐる。

不行處ヲスラ尚不可得ナリトイフツ

之ヲ護持ストイフツ

前ニ尊ノ形量ヲ問フシカ中ニ兼テ坐及却ヲ問フ

尊全トハ三昧名也上ニイフテキ

我何ゾ作サズトイフテム

外觀ノ像ヲイフツル如クハ

前ニ本尊ノ形量大小ヲ問フテキ

その他

効　ナラフテ　相稱　カナフテ　樂　ネカフテ

等があり　金光明經(一七九二)(假名遣及假名字體沿革資料による)に

値　マウアフテ

京都帝國大學國語學國文學研究室藏金剛頂瑜伽經卷第三（一八〇三）に

願　シタカフテ

石山寺藏大唐西域記（一八二三）に

襲　オソフテ　奮　フルフテ　競　イソフテ　諫　イソフテ　辭　イフテ

高僧傳（一八二三）（假名遣及假名字體沿革資料による）に

効焉　ナラフテ　遇　アフテ

香藥鈔（一八二五）（右資料による）

呼　ヨフテ

十七憲法（一八三三）（右資料による）に

逢　アフテハ　對　ムカフテハ

以上が院政末葉迄のものを大矣翁の資料を拜借して列擧したものであるがその中にはウ表記のものは見出されない。

隨つてauからauへの變化の途中はフを以て表はされた音韻組織のものがあつた事が分るであらう。

八　音便ノ表記の本質

前掲法華經釋文の　ヨバテ　から初めて毛利公爵家藏史記呂后本紀（一七二九）西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經

朱點（一七三八）の省略表記は鼻母音の介入されたものと考へられるが、呂后本紀の加點を溯る事四九年も以前には石山寺藏成唯識論（一六八〇）の　オホフテ　の如きフ表記のものがあるのであるから、法華經釋文のものは兎角呂后本紀及び加持經朱點のものはフ表記の發音に近いものであつた事は云へると思ふ。ウ　フ共にハ行四段の連用形がteに連る時に表はれる音便表記であるし稍〻時代を同じうするものであるからウ表記が合音uを表はすものではなくて鼻母音を含む表記であると推定したのでフも亦合音uではない事は考へられる事である。ここで字音に用ひられたフを檢べて見よう。

(1)「フ」がn音に用ひられた場合

板（ホフ）循（スフ）範（ホフ）誼（クヴフ）煥（クヴフ）槃（ホフ）　瓊（セフ）悍（カフ）瞿（シフ）紬（ダフ）醇（ヘフ）盥（クヴフ）俱（カフ）（根の誤りか）　擽（タフ）（以上高野山龍光院藏大毗盧遮那成佛神變加持經朱點一七一八）

戾（タフ）懼（タフ）欄（ラフ）板（ラフ）迅（シフ）純（トフ）（以上高野山龍光院藏大毗盧遮那成佛神變加持經一七一八）

函（タフ）（智恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓）

迅（シフ）闇（ケフ）（西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經朱點一七三八）

燉（トフ）（法隆寺藏妙法蓮華經玄贊一七八二）

(2)「フ」がng音に用ひられた場合

鉶（シフ）（高野山寶壽院藏金剛頂瑜伽中略出念誦經一七三四）

仰（キヤフ）（西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經朱點一七三八）

(3)「フ」が入聲に用ひられた場合

A　唇内入聲の例

法驃（可不清濁）（聖語藏御本唐寫阿毗達磨雜集論古點文學研究第廿三輯）

楫（イフ反）（黒板博士藏金剛樂若集驗記）

執（シフ）業（コフ）師（サフ）給（キフ）（西大寺藏金光明最勝王經白點）

楫（音伊不）（類從本日本靈異記上第五）

蠟（ラフ）（仁和寺藏金剛頂瑜伽護摩儀軌一六五一）

陜（ケフ）（俠狹の誤りか）（高山寺藏蘇悉地法一七一五）

葉（エフ）怯（カフ）（高野山龍光院藏大毗盧遮那成佛神變加持經七帖一七一八）

B　k入聲の例

註　期尅（伊乃古不）（興福寺本日本靈異記上第三）

育（イフ反）（石山寺藏法華義疏一六六二）

若（シャフ）（西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經朱點一七三八）

C　t入聲の例

鉢（ハフ）（西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經朱點一七三八）

D　唇内入聲をt入聲の漢字で寫した例

劫（音怒）（新譯大方廣佛華嚴經音義第七）

右の如くフは入聲字音表記に用ひられてゐるから促音と考へられるが又u音ng音にも用ひられてゐる所を見ると音

便の場合のッ表記は純然たる促音とは考へられない様であつて、フが所屬する母韻はウの場合と同じく長音的なもので、その韻尾は矢張り鼻母音を含んだものらしく考へられる。卽ち長母音の語尾が一種の「含む」或は「呑む」と云ふ程度の閉鎖に終つたものであらう。山田博士が「平家物語の語法」(下一七七六六頁)に於て平曲の發聲を

前の音を稍、長く呼び次の音にうつり行き中間の音は微にして殆ど省かれたる如きすがたなりしにあらざるか

との解釋を加へられてゐる。平曲の發音法を以て直に平安朝中期の發音を推す事は危險であるが、ッの表記或は表記號のない部分の發音法が平曲によつて傳へられたと考へる事は出來るわけである。かかる弱い閉鎖音が院政頃のハ行四段の活用語尾の變化の際行はれたのであつて、ッの表記が未だ行はれなかつたのも肯かれるであらう。かうした微弱な閉鎖音にフの表記號が用ひられたのはッが字音入聲の表記號であつたからであらう。而して音便にこの字音表記のフの音をその儘持つて來たものと思はれるのである。更にフの音價に就いて限定を加へれば、フの原形は明かに不の略體であると考へられるから、片假名のフを表記號として用ひたもので隨つてハ行fuの兩唇的摩擦音Φが入つてゐることは確かであらう。國語史概說(九〇頁)に

新撰字鏡に「犇乎不止」 倭名抄に「夫乎布度」「後伊萬乃乎宇止」

などあり ヲフト。 ヲウト。 と兩樣あるが其のフ・ウは何れもヒ(fi)の母音のおもたfを表はすものではあるまいか

との說明が加へられてゐる。これもiが音韻變化の際字音フの表記を以て表はしたものであると解し得られるであらう。その音は入聲であると共に兩唇の閉鎖とその後の破裂に伴ふ促音的なものでなければならぬ。隨つてその音をΦ

を以て表はしてもその音價に對しては妥當であらう。近衛公爵家本琴歌譜（一六四一）の伊勢神歌に大日盧（おほひるゝ）が

於不保（手）比上（手）流知上米（手）

とあつてゐる、この中の不保とある事に就いて京都帝國大學國文學會上代文學研究會に於て池上禎造氏が御注意され、その後朝山信彌氏からも御教示を願つた事があつた。不をO列兩唇音に先行するウ列兩唇音としても母音uを次に來るF子音との「わたり」は閉鎖された所謂「のむ」と云ふ形に於てなされる事が看取出來るのである。或は不をハ行兩唇音の子音と見てはどうか。さうすれば純粹な國語表記でない所のもの、即ち單音字母表記となるので、ウと同じく表記省略の可能性をも持ち得るわけである。字音に於ては西大寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經朱點（一七三八）に

仰（キヤウ）若（シヤウ）擧（タウ）那（ナウ）

の如く左註にてフを省略したのが見られるがその後にも毛利公爵家藏史記呂后本紀（一七三三）に

尊タ文トク

とあつて、フを斜線＼を以て消さんとした痕跡のものが見られるのである。又それとは反對に京都帝國大學附屬圖書館藏蘇悉地羯羅經の朱點（一五六九―一七三九の加點と推定）に

如依（シタカフテ）法則

とあり、シタカテのカとテとの間に墨點（一七八一）でフを插入してあるのも見られるのであつて、フの表記が如何に

取扱はれてゐたかを物語つてゐるのである。

玄奘傳傍訓（一七七六）（假名遣及假名字體沿革資料による）には

尙學（コヒネカフテ）

とあり、その後には吉澤博士御私藏南海寄歸傳（一七八八）には

冀（ネカテ）

とフが省略され、再び醍醐寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經略疏（一七九〇）には

樂（ネカフテ）

とフが符せられてゐるのは、その表記の不安定を物語ると同時にフの音價を暗示するに足るものである。尙鎌倉時代に入つても「國語國文の研究教行信證の訓點は坂東語か」に於て吉澤博士は元永點選擇集に

嫌（キラフテ）　嫌（キラテ）

と同一の書に兩樣の表記のあるものを揭げてゐられる。又一身田專修寺藏尊號眞像銘文（一九一八）にも

北向（ムカ）フテ　北向（ムカ）テ

と兩樣の表記が施されてゐるのである。以上の例の如きもt音に連るウ音便以外にs音に連る場合も同じ事が云へる樣である。例へば高山寺藏蘇悉地法卷上（一七一五）に

想（モフシ）所の者

とあり醍醐寺藏大毗盧遮那成佛神變加持經略疏(一七九〇)に

問(トフシカ)

とある事は前に掲げて置いたが、この過去の助動詞の連體形に連る場合の音韻變化の表記に於てもハ行四段ウ音便のフ表記の例と同じくフの音價を考へてはどうであらうか。菊澤季生氏は國語音韻論(二四五頁)に於て童蒙頌韻に

習　イフシク　イッシク

とある事を指摘してゐられる。又高山敬書寫の眞俗二點集の點圖を播くと東大寺三論宗用之とある點圖には

イシコトク

とあつてフの省略と見られるのがある。松浦の能になれば

ムカシサテヒコトイッシ人

と明かに促音に表記されて來るのである。この樣にッの表記になれば促音表記としての定著期に到達したのであるが、それ迄にフの表記とその省略の混亂期に次いでッ、ッの表記の動搖時代があつた事が考へられるであらう。鎌倉時代の書寫と思はれる島田乾三郎氏藏釋迦如來念誦之次第に

分明ナリト思フテ

とフ表記があるが、同書は又この時代に促音をッを以て表記し始めた時代の書寫の經典であるらしく

瑜伽者ノ足下ニ有リト思ッテ

とあつて同一の書にフ、ツの兩表記が用ひられてゐる事はフ表記がツ表記に移り行く過程を示してゐるものと見てよいであらう。此處に促音表記にッが用ひられてゐるものが現はれたからと云つて直にッ表記に一定するとは考へられぬ。縱令ある一部ではッを用ひたとしてもフの表記も亦他方踏襲せられる事もあり得る事で、フ表記時代と同じ長促音の發音法が殘つてゐたと見るべきであらう。それ以外のもの例へば醍醐寺本遊仙窟（一九六〇）にも尙

言遇請（イフテ　フテ　コフテ）

とありウ表記は只だ

重（タウトキ）

とあるのみである。かうしたものは訓點であるからその書寫に傳統的な表記が施されたのであるとも考へられようが、必ずしも訓點に限らず院政鎌倉期或は室町時代の書寫と思はれる平安朝の日記物語類にもかかる表記は多數に見出されるのである。口語法別記がこの事に注意してゐることは前に述べたが、近くは小林好日氏が日本文法史（一〇六頁）及び天曆以前の音韻變化について（三頁）（文學第七卷第十七號所載）に、う、ふ兩表記を共にした例を平安朝の日記物語類から豐富に擧げてゐられる。竹取物語（拙稿國語國文第六卷第五號校本竹取翁物語を參照）、を例に取るとt音の前に來る音韻變化の場合には

御そぬきてかつけ給ふつ　（山岸本　前田家本　金森本　刊本系統）

かくや姫の家に入り給ふて　（類従本）

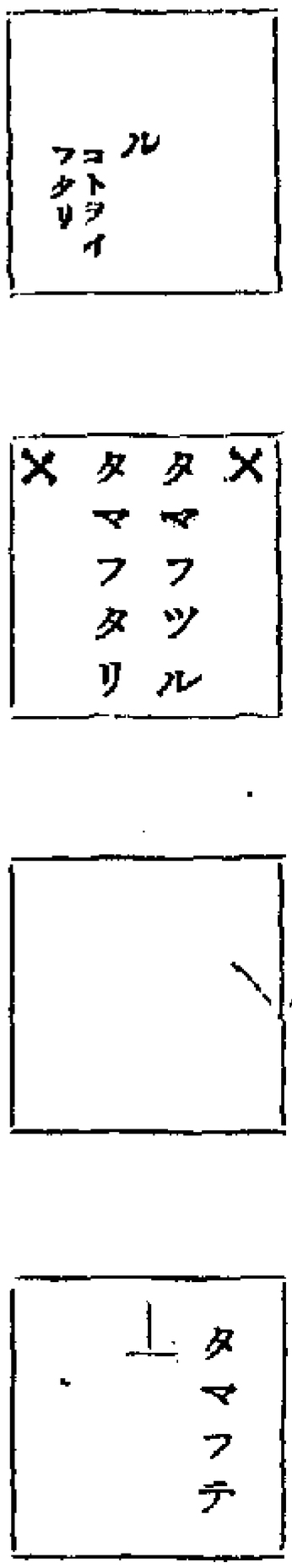
とあり、ｕの前の音韻變化の場合には

いらふるやうなし給ふそ　（前田家本）

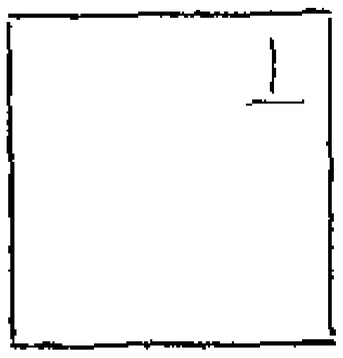
いたくな侘させ給ひ奉らせ給ふそ　（前田家本　刊本系統）

その他類従本和泉式部日記　大和物語　讃岐典侍日記に　給ふて　の表記が多數を占めてゐる。尚高山樹書寫の眞俗二點集によると

東大寺三論宗用之　（眞俗二點集卷二）



西墓點　園城寺用之　（眞俗二點集卷六）



と散見するのは表記混亂期の寫本たる事を示すものと云つてよからう。隨つてこれ等の文獻の示す所のフはｕ音ではなく一種の長促音であつて撥音的雰圍氣から少し脱しかけたものである事が分るであらう。即ち院政期に入ると共に

促音的な力强い響も國語音として慣れる樣になつたからでもあらう。この頃は武士階級の擡頭しかけた頃である事も考慮に入れるべきである。然しこれも急速に促音になつたとは云へぬであらう。矢張り漸次促音的色彩の濃度を加へて鎌倉武士の用ひたと思はれる促音への一歩近づきを院政期の長促音は持つてゐたのである。

註　期廻の文字は期廻と書き代へられるのが至當であらう。廻は廻の俗字であり、時刻の廻と見ればこれはK入聲の文字であるから註にある、伊乃吉不の吉不は廻の音を表はした音註であると考へる事が出來ないであらうか。かくすれば「伊乃」は何を意味する言葉であるかと云ふ事が問題となるが、或は干支の戌の「イ」ではなからうか。或は「亥」の「ゐ」を誤り寫したのではなからうかとも思はれる。孰れにしても「伊乃」の「伊」は何か名詞を表はす言葉であり「乃」は所有格に立つ助詞「の」であると考へる事も强ち不可能ではなからう。K入聲をF入聲を以て表記した例がある所を見れば、「吉不」は廻の字音表記とする事も出來るのではないか。可成り横道へ逸れたが暫定的試案として提示するに止めたい。

因に板橋倫行氏校譯「日本靈異記」には期廻（いのこひ）として動詞として取扱つてある。その他の諸氏の詳しい考證は未だ管見に入らないのを遺憾とする次第である。國史大系本扶桑略記欽明天皇卅二年の條には　期廻の二字を省いて

彼犬子。毎向二家屋一　嘷吠。（アエホユ（或本假名））　家屋脅惶。告二家長一言。此犬打斃。

とある。

九　ウ音便の發生

フ、ツ兩表記の混亂期に於ては此のフ表記が形容詞にまでもその使用範圍を擴充して行つたものらしい。延慶本平家物語（一九六九）には

アフナフ　ユヽロ細フ　ツヨフナル

論語義疏（二一三七）に

直ナホフスル

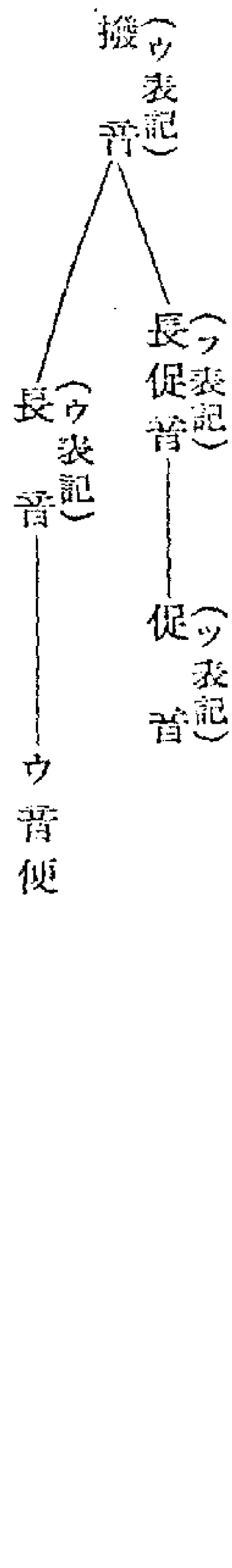
とあつてこの時代頃がフが長促音的なものより長音への變化を來しつゝあつた過渡期と考へることが出來るであらう。從つてフが長音的への變化と共に此處に初めてハ行四段の長音化が成立し今日の所謂ウ音便となつたと見るべきであらう。延慶本平家物語に漸くウを以てしたハ行四段の活用語尾の表記　アウテ、ヲウテ　ソウテ　タタヨウテ　等が現はれて來るのである。

かく考へて來ると平安朝中期に現はれたウ表記と室町時代のそれとは音韻組織の上では同一でない事は誰しも肯かれる事であらう。ハ行四段の連用形の活用語尾の音韻變化をウを以て表記した事は事實の證する所であるが、このウ表記發生の暫時の後に既に天喜二年には語中t音を受ける場合の變化にフが用ひられ、院政初期からはフ表記の方がウ表記を遙かに壓倒して用ひられてゐた事は撥音より長促音への變化を物語るものである。その間にウ表記のものも全然ないとは云へぬがその數は極く僅かである。只だ　ヨバウ　のみは諸點本に各時代を通じてウ表記の多い事は先に述べた所である。室町時代に入ると鼻音は消失して全くn音を韻尾に持つ長音と變化したのであらう。それは形容詞の副詞形のウ表記もこの時代に多く現はれ始めて、形容詞のウ音便と同じ音韻過程を持つものと推定されるからである。又この時代にng音の表記がフ〈ウ各表記混亂時代を脱してウ表記に一定するにつれて、ウ表記が連母音或は單長母としての音を表はす表記と成り終つてゐた事も推察出來るのであつて、喉内鼻音と云ふ名稱は我國に於ては名實伴はぬ音となつたのも、ハ行バ行四段活用語尾の長音化に並行した現象と認められるのである。かかる音韻の變

化が二方向に分岐し、一は長促音化し一は長音化する際、後者の單長母音は勿論o:或はōで表し得るもの即ち開音であらねばならぬ。少くとも今日上方近畿で行はれるハ行ウ音便がオ列漸強二重母音になるまでのものは開音のオ列單長母音のものであつたと考へて少しも無理ではない。遂にはウ表記に引かれて二重母音群の後母音をウ列の音に強く發音する樣になる事は朗讀の際に起り勝ちな傾向である。それはウ表記で終る四段活用の終止形をウ列の母音を強く發音する事からの類推によるのであらう。隨つて從來の au→oo→ō の過程は肯定し兼ねるのであつて、añ→ō→au と云ふ過程に改めるべきであらうと思ふ。同時にそれは añ→ō→ou の場合にも適用出來るので、更に au→ô 或は ou→ô と合音に變化し得る事も肯かれるであらう。裏日本近畿地方に於てはこのoの合音化が特に著しく、文字通りの オモウテ(思) コウテ(買) の如くôになつてゐる。それに對してō或はooの場合は山形福井滋賀德島地方に發音されるらしい。隨つて同じウ音便の中でも開合二樣の音を持つてゐる事はウ音便の音韻變化の過程が然らしめる當然の歸結と云はねばならぬ。促音便は云ふまでもなくフ表記の長促音が促音化しツにて表記されたのであつて、一方ウ音便に音韻上二樣(或はそれ以上あるかも知れぬ)を認める事が出來るとすれば、この長促音が促子音の消滅によつて動詞語幹の母音をそのまゝ長音化したものも行はれてよい筈である。カータ(買つた) アラータ(洗つた)等がそれであつて、福島縣富山縣丹見區域に話される事が音韻調査報告書(二五七一)に報告されてゐるのである。言語變遷の過程を顧る時その中途のものがある地方にのみ殘存し、それが文化的に洗練された都會に入る程古い言葉の姿を失つて行く事は考へられるのであるから、ウ音便の過程は長促音を古いものとしてそれからauouが都會の口語に適する爲に發生したのではなかつたかと考へ度い。

十　結び

今まで述べて來た所の過程は次の如く要約出來るであらう。



縱令一歩讓つてuuoouôから促音便になつたと考へても、さしあたりu音の消滅の原因を探究せなければならなくなる。それが爲にはu音の微弱化を以て筋道を立てんとする方法も考へられるであらうけれども、それは不合理な事であつて、u音の微弱化で直に促音化しない事は近畿地方に於て　オモタ（思うた）　オタ（遂うた）　コタ（買うた）と發音される事でも分るであらう。今日の促音は既に鎌倉時代にフ表記からツ表記へ移つた時の促音をその儘受け繼いだものであつて、ウ音便とは別途の變遷過程を經て來てゐるのである。その系統は關東武士の言葉としての特殊な領域に發達したのが初めであつて、その儘「借ツタ」以外は上方への進出を全くなさなかつたのであらう。若しウ音便のuの微弱化が起る可能性ありとすれば上方にもハ行促音便の發生が起りそうなものであるが事實はこれを全く否定してゐる。尙ハ行四段の音便形式を各地方によつて調査した諸賢各位の考察を例出し、合理的な結論に近づいて行くべきであるが、一先づ此處で粗漏の責を荷ひ高所の御嚴正を俟ち度いと思ふ。

拙稿製作に多大の御激勵を賜つた吉澤博士、並びに補訂に際して御指導を仰いだ遠藤先生に深く感謝の意を表し上げる次第である。（昭和十五年二月二十五日記）